

アイルランドのスポーツ環境における 公共性形成に関する研究

— パスウェイ構築および地域クラブと
学校の課外活動の関係性に着目して —

海老島 均

はじめに

アイルランド島は、日本の北海道よりやや広い面積である。イギリスに
帰属している北アイルランドは全島の13パーセントの面積にあたる。ア
イルランドは人口512万人（2022年国勢調査）であり、北海道の人口（約
560万人）より少ない小国である。しかし、近年の経済発展はめざましく、
2021年の国民一人当たりの名目GDPではルクセンブルグに次ぎ世界第2
位であり、国民一人当たりの購買力平価でも世界第3位となった。これら
の数字は国民の生活の豊かさを示しているといえる。スポーツが盛んな国
民性でも知られ、2023年1月のラグビーの世界ランキング（男子）では1
位に輝いている。しかしながらアイルランドにおけるラグビーの競技人口
や国民の関心度での位置づけは、こうした観点において圧倒的に1位であ
り続けているGAA（Gaelic Athletic Association）種目（主な競技がゲーリック・フ
ットボールとハーリング、カモーギ）に遠く及ばないところである。この
GAA種目は国民の大半を占めるカトリック教徒の小教区（パリッシュ）に
一クラブが形成され、コミュニティ・クラブとして発展してきた歴史を持
つため、特に地方においては、人々の生活と非常に密接な関係を持ち、地
域によっては地域コミュニティ＝GAAクラブというところも決して珍し
くない。ラグビー、（フィールド）ホッケー、クリケットといったイギリス

型スポーツは有名私立中等学校で教育の一環として課外活動で盛んに行なわれてきた経緯から、中上流階級の人たちを中心にプレーされてきた。またサッカーは社会階級に関係なく広く人気があり、競技人口ではGAA種目に迫るほどであるといわれている(複数種目を掛け持ちでプレーする選手等も多いため、アイルランドでは競技人口の比較にスポーツ関係者は感心を持たない)。オリンピック種目では伝統的にボクシング、陸上競技(中長距離)、馬術で多くのメダルを獲得してきた。ボクシングや馬術はクラブで限定的に行われるが、陸上競技はクラブ、学校両方で冬場のクロスカントリーレースが特に盛んである。GAA種目を中心にさまざまなスポーツ種目を学校や地域クラブで楽しむアイルランドのスポーツ環境において、スポーツ関係者がスポーツの価値はソーシャライゼーション(社交)とカマラディー(友情)にあると強調した場面に何回も遭遇した(山下・海老島, 2012)。アイルランドのスポーツ組織全体を統括するスポーツ・アイルランドの前身であるアイリッシュ・スポーツ・カウンシルのスポーツ振興における目標に「モア・ピープル, モア・ファン (More People, More Fun)」というスローガンがあった。より多くの人に参加して、より楽しいスポーツ環境が生まれれば、自然とそこから世界レベルの選手が生まれてくる、と当時の担当者はこの言葉の背景にある理念を説明してくれた(海老島, 2013: 13-14)。アイルランドは国の規模も大きくないという背景があるため、初心者からトップレベル(国代表レベル)まで、小国であるが故の少ない競技人口を一人も無駄にしない環境をつくる上でシームレスなパスウェイ¹⁾が重要視され、スポーツ関係者の熱意により維持されてきた。

また、アイルランドのスポーツ環境におけるもう一つの特徴が、日本と

1) もともと「通路」「通り道」という意味であるが、初心者からトップレベルまでの競技者の成長過程、それをサポートする環境等を指す。日本では「アスリート育成パスウェイ」という表現がなされ、タレントを早期に発掘しトップレベルまで育て上げることを念頭に置いたエリート競技者に特化した使い方がされる傾向にある。

同様に学校での課外スポーツ活動がとても盛んな点である。それと同時に地域スポーツクラブに関しても、国内で最も人気のある GAA クラブを中心にコミュニティの象徴的存在になっている点である。この二つの観点、グラスルーツからトップまでのパスウェイ構築、また学校スポーツと地域スポーツの共存において、アイルランドの民間スポーツ組織の役割について、スポーツ・アイルランドと GAA を中心に調査研究を行った。

1. ナショナル・スポーツ・キャンパス

首都ダブリンの西部郊外に位置し、おおよそ2平方キロメートル（東京ドーム42個分）の敷地に、様々なスポーツ施設や国内の各種目の競技連盟(NGB)の本部が位置する。2004年にマスタープランがつくられ、2006年に National Sports Campus Development Authority (NSCDA) が国家的プロジェクトとして設置され、2013年には様々なスポーツ種目のハイ・パフォーマンス・センターが完成し、現在も施設の拡大、拡充が進行している。現在(2022年12月)までに完成、使用されている施設は以下の通りである。

- ・ Sport Ireland Campus Fitness
- ・ Sport Ireland National Aquatic Centre
- ・ National Aquatic Centre Competition Pools
- ・ Sport Ireland National Indoor Arena
- ・ National Indoor Athletic Training Centre
- ・ National Indoor Training Centre
- ・ National Indoor Covered Pitches
- ・ National Gymnastic Training Centre
- ・ Conference Centre & Meeting Rooms
- ・ National Horse Sport Arena
- ・ Aquazone
- ・ Multi Sport Pitches

- ・ Hockey Pitch
- ・ Sport Ireland Campus Turf Pitches
- ・ Cross Country Track
- ・ National Indoor Arena Private Gym
- ・ National Modern Pentathlon Centre
- ・ National Dryland Diving Centre
- ・ Cyclocross Skills Zone
- ・ Campus Walking Trails
- ・ Sport Ireland Institute
- ・ GAA National Games Development Centre
- ・ IRFU (ラグビー協会) High Performance Centre
- ・ FAI (サッカー協会) National Training Centre

ナショナル・スポーツ・キャンパスの運営は、スポーツ・アイルランドが出資して設立した管理会社 (Sport Ireland Facilities, DAC) が担当している。27の競技団体の施設や本部を一つにまとめることが主目的であった。アイルランドにおいてナショナル・トレーニングセンターの機能を果たすこの施設が、それぞれの競技種目の国代表選手などの国際レベルの選手が練習や試合、体力トレーニング、合宿を行えるような最高レベルの環境を有しているのはもちろんのこと、全ての施設ではないが一般にも開放していることがアイルランドのスポーツ環境のユニークさを反映している。スポーツ・アイルランドのホームページにはこのキャンパスが「全てのアイルランドのスポーツにとってのホームであり、全ての施設が競技を始めたばかりの子どもから国を代表するトップレベルの選手たちまで、老いも若きも、一人でも友人と一緒にでも利用できる」²⁾ことを示している。所有施設

2) Sport Ireland ホームページ (<https://www.sportirelandcampus.ie/>) 2022年12月2日閲覧

が「コミュニティに貴重なアメニティを提供している。それは施設の貸し出し、子どもたちの合宿、スポーツアカデミー、誕生会、チーム・ビルディングのためのイベント、会社関係の会議等、多岐にわたる。さらにハンディキャップを抱えたアスリートや慢性的な病気よりの回復期にある一般の人々を対象としたインクルーシブなプログラムも用意されている」³⁾とあらゆる用途にオープンな施設であることが強調された。

アイルランド政府がまとめた National Sports Policy 2018-2027 には、「われわれの総体的な政策目標では、施設、特に公的資金が使われて建設されたものは、幅広い利用者がフルにアクセスでき利用できるべきであるとしている。政府はこの点が適切に遵守されているかを継続的に点検していく」と書かれている。この方針に関してスポーツ・アイルランドの担当者は「このスポーツ・キャンパスのマスタープランで重要なことはインテグレーションである。われわれはエリート選手のためだけにこの施設を建設したのではなく、一般の人々がアクセスできるということが念頭にあった。もちろん、基本的にエリート選手だけが利用できる施設やスペースもあるが、それは極めて限定的である」⁴⁾と説明した。「例えばニュージーランドのオールブラックスが試合前のトレーニングで使用したり、イングランドのプレミアリーグのプロチームがトレーニング施設を使ったりしたことがあるが、その時も使用料金が徴収された」⁵⁾という実例が示すように、スポーツ・キャンパス内の施設がエリートスポーツの聖域でないことが強調された。さらに利用者相当の使用料を取ることにより、運営費を縮小すること、助成金への依存度を減らすことがポリシーの中に示されている (Government of Ireland, 2019: 60)。

-
- 3) Sport Ireland ホームページ (<https://www.sportirelandcampus.ie/>) 2022 年 12 月 2 日閲覧
 - 4) Sport Ireland での財政部門のディレクター A 氏へのインタビュー (2022 年 11 月 3 日, スポーツ・アイルランド本部, スポーツキャンパスにて)
 - 5) 同上

現在14から15の競技団体の本部がこのキャンパス内に位置している。ラグビー協会やサッカー協会など規模の大きな競技団体は街の中心部にも本部があるが、将来的にはこのキャンパス内に全ての機能を移す計画が進行しているという。「長期的には、アイルランドの全ての競技団体がこのキャンパス内に本部を構えることが、われわれのマスタープランである」⁶⁾と国内のスポーツ・マネジメントに関わる機能をここに集約することを目指している。さらに広大な敷地を活かして、今までに国内になかった自転車競技関係の施設（ベロドロームやマウンテンバイクのコース）、バドミントン用のインドアアリーナ、クリケット用の施設などが建設中であり拡充を図っている。

政府からの助成金がスポーツ・アイルランドを通して各競技団体に運営資金として配分されるのであるが、「GAA、ラグビー協会、サッカー協会等のメジャーな競技団体に対しては、グラスルーツの振興に関わる費用に限定して配分している」⁷⁾という特例がある。この背景にはこれらの競技団体は、独自のスポンサーが多数存在し、観客収入等で十分な運営資金を有していることがある。競技人口や国民的な関心度といった観点で国内最大のスポーツ団体であるGAAは、このキャンパス内に5面（そのうち4面が照明施設付き）のピッチおよび練習用施設、会議場などを持っている。これらの施設はGAAの場合、トップレベル（各カウンティの代表選手）に限らず、国内のクラブ、学校等が予約をして使用することができるオープンなものとなっている。Game Development Centreと名付けられ、ゲームの普及、つまりスポーツ・アイルランドからの助成金の目的にかなった使い方がなされているわけである。

「ナショナル・キャンパスにあるGAAの施設は基本的に誰でも使える。学校間の試合がプレーされたりもする。どのクラブも予約すれば使うこと

6) Sport Irelandでのインタビューより

7) 同上

ができる」⁸⁾と、むしろグラスルーツに特化された施設として運営されていることを GAA 本部は強調する。

スポーツ・キャンパスが一般大衆のスポーツ実践に寄与することが第二の目的であると前出のポリシーでも表現されているように、例えばアクアティックセンターに 2017 年だけで 110 万人の人が訪れている。国内のスポーツ施設でもっとも多くの人に利用されたことになる。

2. スポーツ・アイルランドからの各競技団体への 助成金配分に関して

アイルランド政府からの助成金を中心となるスポーツ振興基金を、スポーツ・アイルランドが各競技団体に振り分ける際プロセスは、「それぞれの競技団体が毎年助成金の申請を行う。決定プロセスは透明性が担保され、スポーツ・アイルランドの理事会で決定される」⁹⁾となっている。競技団体の規模（トップレベルの競技環境やグラスルーツレベルの愛好家も含めて）、競技成績等が考慮されるのであるが、「グラスルーツレベルの振興に関しての評価は、主に参加者数の変化をモニターしている」¹⁰⁾という評価基準で査定している。前述したように、国内最大の 3 つの競技団体（GAA, IRFU: ラグビー, FAI: サッカー）に対しては、グラスルーツの振興に限定した助成金が配分されている。それ以外の団体ではグラスルーツから代表クラスへの振興・強化に関係する費用に対して助成金が支払われている¹¹⁾。

8) GAA 本部の Game Development 部門のディレクターである B 氏へのインタビュー（2022 年 11 月 4 日、クロークパークにて）より

9) Sport Ireland でのインタビューより

10) 同上

11) Sport Ireland でのインタビューの際に資料として示された Sport Ireland, Financial Statement (For the 1 January to 31 December 2020) に詳細が記載

3. 国際競争力に関して

スポーツにおける国際競争力が投資額と相関を示すことは国際的に証明されている。2012年のロンドンオリンピックでの成績で見ると、その準備期間に投資額の大きかったのは韓国、日本、フランス、オーストラリアであり、これらの国々はそれに見合う成績を残している (Government of Ireland, 2019: 54)。スポーツ・アイルランドの担当者は、「われわれが目しているのは、人口の規模が同じくらいの、ニュージーランドやデンマークである。ハイパフォーマンスレベルでの予算に関しては、数年前までこうした国に大きく遅れをとっていた、いまやデンマークと並ぶくらいになった。ニュージーランドは未だにわれわれよりかなり先を行っているといえる」¹²⁾。それでもデンマークの投資額はアイルランドの約2倍である。またニュージーランドやデンマークがメダル取得の可能性の高い種目にターゲットを絞って強化費を助成しているのに対して、アイルランドはターゲットを絞らず少ない強化費を比較的平等に助成しているため、各方面からその非効率性が批判されている。しかし、これがアイルランドでグラスルーツからトップまでの自然なパスウェイが構築されている所以であるともいえる。

4. 学校スポーツと地域スポーツが共存する環境

— 競技団体 (GAA) の役割 —

Fahey ら (2005) はアイルランドの中等学校の生徒 3,500 人以上に対するアンケート結果から、学校や地域クラブで行っているスポーツ活動の頻度に関して数量的に分析した (表1)。

この調査結果からアイルランドでは学校スポーツと地域スポーツが参加

12) Sport Ireland でのインタビューより

アイルランドのスポーツ環境における公共性形成に関する研究

表1 アイルランドの中等学校生徒たちのスポーツ活動頻度

	学校の課外活動			地域スポーツクラブ		
	男	女	全体	男	女	全体
週4回以上	33	10	22	25	11	18
週2～3回	29	30	30	39	30	34
週1回	15	23	18	14	22	18
月2～3回	2	1	1	2	2	2
月1回	1	2	2	2	2	2
ごくたまに	4	6	5	4	6	5
参加無し	16	29	22	15	28	21

出典：Fahy, T. et al. (2005) から海老島が作成（数字はパーセンテージ）

率において、ほぼ同等な形で共存していることがわかる。学校と地域クラブのいずれかで、週2～3回以上スポーツをしている生徒の割合がそれぞれ半数近くになる。学校と地域の両方のクラブに所属している生徒も少なくないと考えられるので（調査ではこうした生徒に関するデータは含まれていない）、多様な参加形態、多様な種目を組み合わせて、生徒たちがアクティブにスポーツライフを楽しむ環境が形成されていることが推測できる。学校でも地域でも多様（種目および競技レベル）なスポーツが用意されていて、組み合わせ方法も生徒の指向による自由度が大きいことも利点である。この学校と地域の二本柱を支えているのが競技団体であることが報告書では強調されている。

この観点に関して、国内最大の競技団体であるGAAに対して、学校の課外活動とクラブとの関係性についてGame Development部門の責任者に聞き取りを行った。まず大前提になるのが「小学校レベルではほぼ全ての人々がクラブでプレーしている。中等学校、大学のクラブも盛んであるが、基本はクラブである」¹³⁾と原則的に殆どの生徒がクラブのメンバーであるという状況が説明された。GAAクラブは伝統的に非常に強い地域コミュニ

ニティとの関係性を持ち、カトリックの小教区(パリッシュ)に一つだけのクラブを作る制度が協会の創設当時から守られてきた。よってGAAクラブが地域コミュニティと同義語であるほどの関係性が維持されてきた。また協会が学校とクラブの二重登録を問題としない(アイルランドにおいて多くの種目がそうであるが)ということも共存関係を創り出している要因である。さらにもう一つの要因は、「クラブと学校関係のゲームはカレンダーが異なっている。秋から3月くらいにかけては学校間のゲームが盛んであり、その後はクラブのゲームが主体になる。ほぼ全ての生徒、学生がクラブと学校の掛け持ちをしている。学校間のゲームは競技レベルが高いこともあり、地域クラブではプレーするが学校ではプレーできない生徒も多くいる。われわれは学校における生徒の参加率を高めようとする努力をしている」¹⁴⁾。学校間の大会は限られた(競技力の高い)生徒しか参加できない傾向があり、協会は学校におけるより多くの参加を促すことで競技振興を計っている。

学校での活動は殆どが学校の先生によって運営されている。先生は必ずしも体育の先生とは限らない。先生の中には、自らもクラブでプレーしている人もいる。外部コーチを雇っているところもあるが、数は決して多くない。協会は学校の先生またはクラブのコーチ両方を対象とした指導者講習会を開講し、指導の面での一貫性を形成する努力をしている。

近年のアイルランドでの特徴は異なったエスニックバックグラウンドを持っている人が増えていることである。協会や地域クラブはそうした人々の地域コミュニティや学校への馴化にむけても取り組んでいる。「われわれは子どもたちのためのサマー・キャンプを行っているが、例えば現在ではウクライナからの避難民の子どもたちが無料で参加できる試みを行っている。政府や地方自治体と協力してこうした人たちがコミュニティに参加

13) GAA 本部でのインタビューより

14) 同上

できる環境をつくりだすことに協力している。各クラブも体験会のようなことを開催している。競技レベルに関係なく誰でも参加できる機会をつくっている。こうした活動に関しては、われわれ（本部）は基本的に関わってなく、クラブの自主性（自治）に任せている。全国に1,600ほどのクラブがあるが、基本的なルールはあるものの、クラブの運営はそれぞれの自治制が高い¹⁵⁾とこの観点での普及策に関しては協会の調整力もさることながら、クラブの自主努力が功を奏していることが示された。

5. 考察：

パスウェイの構築と学校スポーツと地域スポーツの関係性

アイルランドのスポーツ環境における特徴は、グラスルーツからトップレベルまでの連続性であるパスウェイが伝統的に確立されており、それがナショナル・トレーニングセンターの運営にまで反映されていることである。小国の強みを活かして誰でもトップレベルの環境にアクセスでき、またトップ競技者とのつながりをつくりやすいということが大きなアドバンテージになっているといえる。またGAAを中心としたコミュニティとスポーツの関係性が強固である伝統があるため、競技者をコミュニティが支えていく環境があらゆるスポーツに派生している。さらに、学校の課外活動でもスポーツが盛んで、中等学校や大学で学ぶ生徒、学生たちのスポーツ実践形態の選択肢が多いことも強みである。GAAにみられるように、学校の課外活動クラブと地域クラブの関係性を競技団体がコーディネートしているところが、現在、中学校の課外活動を地域移行していく取り組みを始めたわが国においてとても参考になる点である。ただ、GAAが都会を除く殆どの地域で強固なクラブ組織を有していて、中等学校の生徒たちの多くがほぼ小学生の段階からそのクラブのメンバーであるという基盤が

15) GAA本部でのインタビューより

あるからこそできた学校とクラブの連携であり、モデルとして簡単に取り入れることのできない特殊なケースといわざるをえない。

他のスポーツに目を向けてみると、ラグビーは都会においては私立の中等学校（アイルランドにおいては学費が有償である私立と無償の公立ではスポーツ施設、学力レベルでも大きな差がある）で盛んであり、こうした私立学校間には学校対抗戦があり、代表チームだけでなく複数のチームで基本的に全ての生徒が参加できるような体制がとられているのが特徴である（海老島, 2021）。ここでは生徒の友だちづくり (Socialization) の目的が強調される（海老島, 2016）。アイルランドのこうした課外活動を中心とした学校スポーツは、菊 (2013) が指摘した日本のスポーツの課外活動の特徴である「教育的公共性の規律訓練性が担保されてきた」性質とは全く対極に位置する。プレイを楽しむ「私」がどのレベルにも保証され、この経験が人々のスポーツ観を醸成していくと思われる。その他にもクリケットやホッケー等でも同様のケースが見受けられる。GAA 種目のクラブ中心の基本構造とは異なり、イギリス型スポーツの場合は学校中心の構造があり、卒業後に特に競技にすぐれた人たちがクラブで継続していくという傾向がある。またこうした学校の卒業生は、卒業後、個人種目（ゴルフやテニス）においてクラブに参加する傾向が強いことも報告されている (Lunn et al, 2013)。これがイギリス型スポーツのクラブのメンバーの所属社会階級に偏りが生じることの一因である。学校文化に強固に組み込まれているチームスポーツの課外活動が生徒たちの「われわれ意識」を産み出し、さらに同様の社会階級の子弟で構成される学校間の対抗戦においてもこの意識は強化され、ネットワーク化されていく。

ただ中等学校における課外スポーツ活動に関する問題点も多々報告されている。その一つがチームスポーツ重視の傾向である。中等学校の1年次に友人づくりを目的として多くの学校（特に私立学校）が1年生全員に課外スポーツ活動への参加を呼びかける。そこから年ごとに参加者数は減っ

ていくのであるが、能力の高い生徒だけが残り、それ以外の生徒が取り残される問題も指摘されている (Lunn et al, 2013)。2022年12月5日の Irish Examiner には生徒たちのスポーツ活動への参加率が落ちている原因に「中等学校がチームスポーツを重視して個人種目を課外活動に取り入れていないからだ」という内容の記事が掲載されている。またジェンダー間のギャップも深刻であり、女子の中等学校（アイルランドの大半の私立中等学校が別学）でもチームスポーツが重視されているため、課外スポーツ活動からの離脱傾向はさらに強くなるという (Lunn et al, 2013)。

こうしてつくり出されていく階級差とスポーツ文化の特殊な関係性、また単純に収入の高さとスポーツ実践に強い相関関係があることが報告されている。その他にも都会と地方における特に中高年のスポーツ実践率の差など、いくつか克服・改善すべき様相を抱えているのがアイルランドのスポーツ政策における課題であるといえる (海老島, 2013)。こうした問題を抱えているもの、過度な成果主義やエリートレベル偏重という戦略に固執しない、一般的により多くの人のスポーツ実践に向けてのベクトルが強いアイルランドのスポーツ環境形成は、スポーツの公共性が高いレベルで担保されている様相を示しているのではないかと思われる。

(付記)

本研究は、文部科学省科学研究費助成事業基盤研究 (B)「公共性の歴史社会学的観点から見た民間スポーツ組織の統括性に関する日欧比較研究」(研究代表者：菊幸一、研究課題／領域番号：18H03145)の成果の一部である。

文献

- 海老島均「スポーツ政策を支える公共性概念の比較研究」成城大学経済学部『成城大学経済研究』, 201号, 2013年, p1-21
- 海老島均「スポーツの公共性形成に向けての民間スポーツ組織の役割に関する研究：イギリスのユース・スポーツ・トラストに焦点を当てて」成城大学経済学部『成城大学経済研究』, 229号, 2020年, p1-21

- 海老島均「スポーツの重要性と学業とのバランス：アイルランドの中等学校の課外活動を参考に」山本敦久編『身体と教養』なかにしや出版, 2016年, p157-169
- Fahy, T. et al., *School Children and Sport in Ireland*, ESRI, 2005
- Government of Ireland, *National Sport Policy* (<https://assets.gov.ie/15979/04e0f52cee5f47ee9e,01003cf559e98d.pdf>) (最終閲覧日：2022年12月10日)
- Lunn, et al, *Keeping Them in the Game: Taking Up and Dropping Out of Sport and Exercise in Ireland*, ESRI, 2013 (<https://www.sportireland.ie/sites/default/files/2019-11/keeping-them-in-the-game-2013.pdf>) (最終閲覧：2月14日)
- 菊幸一 「「新しい公共」概念とスポーツ政策をめぐる社会学的視座」『スポーツ政策の公共性に関する国際比較研究』（平成22年～24年度 科学研究費補助金「基盤研究 (B)」研究成果報告書（研究代表者：菊幸一，研究課題番号：22300216）
- Sport Ireland, *Financial Statement (For the year 1 January 2020 to 31 December 2020)*, 発行年不明
- 山下理恵子, 海老島均「アイルランドにおける近年の余暇活動の変化：スポーツ実践にみられるソーシャル・キャピタルの働き」, 日本アイルランド協会『エール』(31), 2012年, p79-100